

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局

〒810-0003 福岡市中央区春吉

1-16-8 VEGA天神南601号

TEL 092(731)2372

FAX 092(731)2373

No.155

2023年4月1日

〈URL〉<http://www.peshawar-pms.com> 〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



[写真] ある日のバラコット工事現場

農地の回復を目指して—バラコット灌漑事業は着々と進行中です

ジア ウル ラフマン

●現地訪問記① 12年ぶりのアフガニスタン訪問

村上 優

② 聞くと見るとは大違い

大和則夫

③ 事業の継続を確認

石橋周一

④ 待ちに待ったアフガニスタンへ

靱井孝文

⑤ 「あなたたちにガンベリを見せたかった！」

山下隼人

⑥ 風景は一変していました

藤野洋子

「菜の花基金」最終報告

村上 優

訪問を大歓迎しました

アブドゥル サープル サダット

医療体制の強化・拡大を

ハフィズラー カニ

◎中村哲医師アーカイブ アジアの同胞としての目の高さを失わず、現地と苦楽を分かち合う

中村 哲

中村哲先輩から広がった世界

邊見紗来

繰り返し発見する中村医師の魅力

古賀翔一郎

【カラー報告】バラコット用水路、崖掘削作業を完了

中村医師の活動の原点 ペシャワールへ／アフガニスタンにて

【カラー連載】中村先生 雨ニモ負ケズ—形を変え、流れ続ける。アフガニスタンでの源流をたどって

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成され、現在は中村医師が設立したPMS(平和医療団・日本)のアフガニスタンでの医療活動や灌漑水利事業等の総合的農村復興事業を支援しています。

ホームページはこちらから▶



あやま 過たぬ人の営み

「人はその日の営みを続けなければなりません。生きるため、ひたすら水を引き、木を植えて緑を増やし、営々と田畑と林を作る。これが過たぬ人の営みであり、全ての人が協力すべきことであり、郷土の安全の基礎だと思います。」

——中村 哲 (ベシャワール会報109号、2011年)

農地の回復を目指して

——バラコット灌漑事業は着々と進行中です

PMS (ピース・ジャパン・メデイカルサービス) 副院長/ジャララバード事務所所長 ジアウルラフマン

約一万四千人の支援へ

皆様の変わらぬご支援に対し、私たち一同はいつも深く感謝いたしております。今回は、バラコットで始まった新しい事業について少し具体的に報告します。

バラコットはナンガラハル州南部コット郡に位置しています。

人口は約十六万三千人で、面積四五〇km²のうち総農地面積は二四〇〇ha (二四km²)です。コット郡は二〇一五年頃から現政権になるまでの間、治安が悪化し、激しい戦闘で家屋や農地の大半が破壊されました。住民は安全な場所を求めて、大半がパキスタンのベシャワールに避難していました。

二〇二一年八月の政変後は平和になってきたので、住民は故郷に帰って来ましたが、あらゆる経済的困難に直面しています。ご存知のように、アフガン人のほとんどは農業収入で生計を立てています。しかし、コット郡の農地は荒れ果て、農業ができる状態ではないのです。

切土^{きど}工事はほぼ完了

我々PMSに取水施設を建設して欲しいというバラコット住民の願いを、地元のシユーラ (評議会) が灌漑局に請願しました。灌漑局からこの件がPMSに伝えられた後、我々は日本の本部に相談しました。日本の技術支援チームとPMSが議論を重ねに重ねた結果、バラコット灌漑事業は承認されました。そして灌漑局とPMSの事業契約が結ばれ、昨年十月に着工。工期は一年で二〇二三年九月三〇日に完工を予定しています。この用水路が開通すれば、新たに約五〇〇haの農地が灌漑され一一四〇世帯が直接に、二八五世帯が間接的に恩恵を受け、推定一万四二五〇人の住民を本プロジェクトが支援することになります。

現在、現場に地元の作業員を三二名、資機材置き場に昼夜駐在するテントガード十二名を配置し、PMS所有の掘削機二台、ローダー二台、ダンプカー四台、水タンカー一台に加えてレンタルの掘削機六台を稼



滞在先のホテルで会議をするペシャワール会とPMSのスタッフら。
(2022年12月28日)

働かせています。現在、用水路が通過する山の側面の切土工事は、全長四三〇〇mのうち四二〇〇m地点までを終えています。コット郡はジャララバード事務所から遠いため、工事現場近くに職員の宿舎を借りています。そこを現場事務所としても使用し、職員の出欠確認や工事の進捗状況をジャララバード事務所に報告するようにしています。また、ジャララバード事務所から職員一名が毎日現場へ出向き、次のような仕事をしています。①現場からのリクエストに応じて建設資材を届け、資機材全ての在庫を確認。②重機や車両への燃料の補給。③作業員の人数と仕事内容の確認。

コットでは、人が生きていくために必要不可欠な支援が実施されるのは初めてのことと、地元の人々はPMSの本プロジェクトを心から喜んでいました。

日本からの訪問団を歓迎

二〇二二年十二月二〇日から二九日の期間、日本の本部から八名(村上PMS総院長、藤田院長補佐、エンジニアサーブ^{おおわ}大和、PMS支援室員ほか)がアフガニスタンを訪問されました。PMS職員とナンガラハル州政府当局は、パキスタンとの国境トルハムでお迎えしました。

ご一行はPMSの活動を視察し、各事業実施地域では地元住民の温かい歓迎を受けられました。またバラコット灌漑事業の現場では、PMS職員たちが一生懸命に働い

ている姿に大変喜んでおられました。技師の大和サーブからは、PMSの技術チームにご指導と励ましを頂きました。

二九日、訪問団のうち五名がカブール国際空港から日本に帰国。シスター藤田、榎井さん、山下さんは二〇二三年一月四日までアフガンに滞在し、マルワリード、シギ、ミライン、タンギトウクチーの取水施設とガンベリの農業プロジェクトを視察して日本に戻られました。PMSの私達も皆さんと本当に久しぶりに再会できて、とても嬉しく思いました。また皆さんとPMSの任務や今後についての協議もしました。これからは是非何度も繰り返し来訪して頂きたいと願っています。まさに「百聞は一見に如かず」と思うからです。心からの敬意をこめて

●現地訪問記①

十二年ぶりのアフガニスタン訪問

昔ながらの生活が戻ってきた

十二年ぶりに訪れたジャララバードは戦争の名残も感じられず、平和に見えた。二〇二二年十二月はまだ暖かく、雨が降らず、山の雪は少なく、冬季は河の水位が下がるはずなのに十分には下がらず、河の中の作

業には支障がある様子だった。

PMSが灌漑した地域では、人々が畑で働き、作物を収穫していた。道路沿いには様々な店が立ち並んでいる。生きた鶏を売る店、牛や羊の肉が吊り下げられた肉屋、山積みされたカリフラワーなどの野菜や果物衣類などの店が連なり、バザールをなして

PMS総院長／ペシャワール会会長

村上 優^{まさる}

いる。学校が終わったのか、カバンを背負った子どもたちが、男の子も、女の子も出てくる。興味津々で我々を見つめていた。

今回の訪問の目的は、中村医師と伊藤和也君の慰霊、そしてPMS事業を視察することであった。行く先々で長老たちから感謝の念を伝えられ、温かい歓迎を受けたことをまずご報告しておきたい。

コット郡のバラコットでの灌漑工事は、これまでのPMS方式とは異なっている。水量の少ない急流の小さな川からの灌漑用水路が山肌に沿って造られようとしている。「小さな川」といっても五kmを超える山々がなす谷は大きく、自然の規模の大きさ、荒々しさは想像以上で、巨礫がゴロゴロしている。こんなところに堰を造るのかと唾然とするが、PMSの技術者と支援室技術アドバイザーの大和さんが熱心に協議を重ねていた。

目を少し上に向けると、そそり立つ崖の大きさ、広々と開ける紺碧の空が全てを包み込んで、静かな村の風景となる。そう、平和なのだ。中村医師が予測したように、この地域でも戦争が去って、難民となった人々が自分たちの力で戻ったのである。人口が増え、耕作地を拡大するの力を貸して欲しいとの村人の希望に添って灌漑作業は始まった。「昔ながらの生活」すなわち「安心」が求められているのだ。それ以上のことを村の人々は望まない、とは中村医師の言葉である。

ベシャワールの明と暗

アフガン入国の前に訪れたパキスタンのベシャワールでは、元PMS基地病院の事務長として中村医師を支えたイクラムラさんと旧交を温めた。彼は今、医療系、特にリハビリテーション教育機関を運営している。その一環でDr. Tetsu Nakamura Memorial Libraryが開設されたので、共に祝い、協力を約束した。彼はまた、昨年八月に起きた大洪水の被害者救済の活動もしており、惨状が残る活動地に案内してくれた。

中村医師ゆかりのベシャワール・ミッション病院も訪れた。想像以上に以前の施設のまま、しかも整っている姿に安堵した。中村医師の記憶も留め、また誇りにしていることも分かった。ただパキスタンでのハンセン病対策はさらに後退し、ミッション病院では完全にその機能を失い、公営の病院ですら風前の灯のようで、薬剤などの供給も不十分ということを聞いた。中村医師が心血を注いだハンセン病根絶計画は、共に働いたスタッフ、システムともに消失する方向にあり、断腸の思いである。何か手を打つべきか、思案をめぐらせている。

耕作地は二万三〇〇〇haに

アフガン東部では治安の改善が目覚ましい。タリバン政治体制への批判は様々あるかもしれないが、何より戦闘が無くなり、欧米軍の撤退だけでなく、ISなどの外国勢力の排除も進んだことを人々は評価し、現

政権を受け入れられている。

州の経済局からはPMS事業（特に灌漑事業）の一層の拡大・強化を期待されているが、これからも淡々と、粛々と事業を進めることが肝要だと思ふ。政治的な出来事には関与せず、人々の苦しみに焦点を合わせることで大切であると中村医師は説いていた。

動画や写真で目にした大河や堰を実際に見ると、その大きさに茫然とする。まさに、「百聞は一見に如かず」である。訪問の回数を増やさなければ、と思ふ。

JICA（国際協力機構）が国連無償援助で計画しているPMS方式の普及事業も大切である。FAO（国連食糧農業機関）とPMSが協力して実際の灌漑事業を進めながら訓練する試みが具体化しつつある。

ドラエヌール診療所の医療活動拡大を望む声も医療スタッフから強くあった。

二三〇haのガンベリ農場整備は順調に進み、中村記念塔がある公園への訪問者は多く、人々の憩いの場になっている。公園敷地を二倍に拡張する計画がある。

PMS事業によって人々が戻り、農業が復興した。PMSが作ったのは灌漑施設で、その後は村の人々が工夫して農地が広がっていったのである。二〇一九年に耕作地は一万六五〇〇haであったが、今回の訪問で二万三〇〇〇haに増えていることが判明した。人口も大幅に増加しているだろう。アフガニスタンの人々の自由な意思に任せた中村医師の見通しの確かさを再確認した。地球温暖化の影響がこの地域に大きく現

れていることは確かである。ケシユマンド山脈の雪は極端に少なく、またスピンガル山脈の麓は干ばつと、時に襲ってくる洪水

●現地訪問記②

聞くと見るとは大違い

PMS技術者支援チーム・理事 大和則夫

はじめに

今回の視察旅行を通じて感じた現地事業の技術的な諸問題について報告する。

アフガニスタンの山川の自然の印象はあまりにも強烈だった。年間雨量二〇〇〜三〇〇mm、山に緑はなく山々は灰色の山肌を呈し、生き物を拒絶するかのようである。大河のカブル河・クナル河の川幅は広いところで一〇〇〇mほどもあり、堤防らしきものはほとんど無く、自然河川そのものである。この大河を目の前にして、ここからの取水を考えた故中村先生の決意、熱意、実行力に改めて敬意を表したい。

- 今回の現地踏査で課題と感じた項目は次のとおりであり、各項目について考察する。
- バラコットの取水導水施設の建設について
- カシマバード取水地点の堆積対策について
- バルカシコットの砂防堰堤等について
- ゴシユタでの取水導水事業について
- ヌールガルでの取水導水事業について

の被害が甚大だ。今後の干ばつに備えるために我々にできることは何か。支援者の皆様と共に考えていきたいと思えます。

- ・ダラエヌール渓谷の干ばつ対策について
- ・沈砂池の排砂方法について
- ・その他の課題について

1. バラコットの取水導水施設の建設について

現在建設が進められているバラコットの用水路に關し、日本にいる時は崖錐がすを通す用水路の建設の難しき、斜面の滑りや崩壊の危険性を感じていたが、聞くと見るとは大違いで、現場の斜面はナチュラルコンクリートと呼ばれる固い地盤がかなりの部分を占め、崩れる危険性は低いことが分かった。地盤の含水比が高い日本では考えられないことである。さらに盛土を無くして全區間切土に変更していたのは安全性を考えると妥当な判断である。

もう一つの用水路の課題は、取水量が少ない期間が長いため、地震等によりクラック（ひび割れ）が入った場合の漏水・蒸発問題である。PMSの施工方法は水路床にソイルセメントを敷くが、さらなる漏水対策としてベントナイト混合土の併用を提案し、

図1に示す簡単な実験を行った。バケツの底に穴を開け、図1のようにバケツの底にソイルセメントとベントナイト混合土を敷き、そこにクラックを入れて水を注ぎ水位の時間経過を観測した。明らかにケース③の水位低下が小さく、ベントナ

図1 バケツによる漏水実験

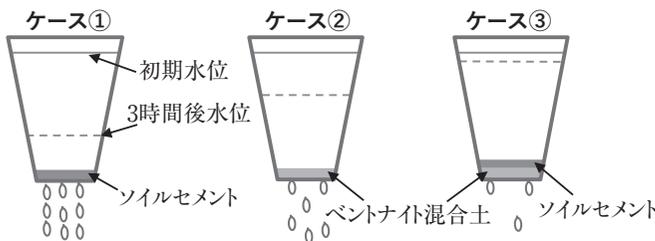
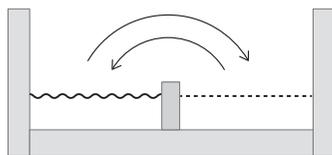


図2 水路案



イト混合土の効果が確認された。この結果を受けて、バラコットの用水路にケース③の方法を検討することにした。また、蒸発問題に対しては、図2に示すように中央にレンガ等による仕切りを設け、少水量時に毎日左右入れ替えて水を流すことよって、流水の表面積を半分にすることができ、蒸発量がある程度抑えることができる。

その後、取水地点に移動したところまたまたびっくり。河川勾配が約三〇分の一で、一mを超す巨石がゴロゴロしていて、おまけに洪水時も取水しなければならぬのである。石で作る堰はもともと洪水時に崩されるので石を積みなおすことは織り込み済みだが、問題は取水門と用水路をどうする

かである。取水口を河川の流れ方向から外し、周りがちがちのコンクリで固め、洪水の影響が無いところまでボックスカルバート（箱型の暗渠）を施工することを提案した。日本に帰って、このような場所での施工に見識のある専門家に相談することにしてバラコットを後にした。

2. カシマバード取水地点の堆積対策について

中村先生がメインに堰等を建設したのはクナル河沿いであり、唯一カブール河に建設したのがカシマバードである。この上流にはソ連が建設したドロントダムがあり、流量調節による河川流量の変化が激しく、取水量にも大きく影響しているとのことである。さらには右岸側の住民が、住居建設のために右岸側の河原から砂利を採取したため、流水が右岸側に片寄るようになり、左岸側のカシマバード取水門の前に土砂が堆積するようになって取水しにくくなっているとのことであった。

ここでの解決策として、三つに分かれた川の流れのうち中央の流れの上流に流水を左岸側に導く低めの堰を作ること、左岸に堆積している土砂を掘削して中央の流れに放り込むこと、さらには取水門の前にコンクリート製土砂吐きを設置することを提案し、PMS技術者との合意が得られた。

3. バルカシコートの砂防堰堤等について

土石流対策と地下水涵養を旨とした砂防堰堤を見学した。下流側から三つの貯水池、

五つの石積み砂防堰堤、その上に二〇の蛇籠作りの砂防堰堤が作られていた。雨が降ると貯水池に五日間くらい水がたまり、徐々に浸透して下流部の地下水涵養に役立っているはずとのこと。PMS技術者から感想を聞かれたので、「良くできていますが、砂防堰堤は五年もすれば土石で満杯になるし、その後貯水池に土石が流入し、十年も持たないのではないか」と言ったら、五年経過以降は地元民が掘削浚渫して維持管理する約束ができていたとの説明であった。現地技術者たちも様々なことに頭を働かせていて中村先生の指導のたまものと感じた。

その後取水地点に移動し、上流高台から堰上流の河川の全体像を把握した。河川の流れは安定しているように見えたが、前政権が作った対岸の堤防が高いのが気になった。中村先生が示された①河川を不必要に狭めてはならない、②洪水時に対岸に影響が出ないようにする、③場所によっては遊水池（霞堤など）を設ける——この三原則は是非とも踏襲してほしいと思った。

4. ゴシュタでの取水導水事業について

ここも聞くで見るとは大違いであった。日本で検討したときは、既存取水地点付近での取水を考えていたが、既存地点では洪水対策と渇水時の取水対策の両立は難しいことが分かった。取水地点を上流に変更し、洪水防衛として低めの堤防を設置する案を推奨し、現地技術者の同意を得た。実際はもう少し上流からの取水のほうがよい良い



新たな取水地点の検討のため、上流側へ移動する大和技師。
(2022年12月21日)

と思われるが、行政区の違いで難しいとのことであった。それでも取水構想で現地技術者と共通認識に立てたことは大きな成果であった。

この事業は、中村先生が進めてきた灌漑事業を、FAOを通じて他地域の技術者を育成し、広く灌漑技術を広めることも目的の一つであり、その意味で適地である。

5. ヌールガルでの取水導水事業について

ここもゴシュタ同様、堰・取水門・土砂吐き・幹線水路・沈砂池・主要排水路を建設することで、中村先生の灌漑技術継承の適地ではあるが、二か所川幅を狭めて川の中に新規耕作地を確保する計画は大



PMS職員達が考案した沈砂池の排砂設備。(2015年12月)

いに問題である。上流側の新規耕作地の対岸には山が迫っていて人家もなく大きな問題にはならないが、下流側の新規耕作地は対岸がバルカシコートであり、人家もあれば田畑もある。ここは是非とも先に示した三原則を守ってほしい。

また、昨夏の洪水時、普段は流れていない右岸側の河道にも水が流れた経緯があり、この機能を生かした川作りをすべきであると感じた。即ち、筑後川の山田堰と千歳分水路の関係のように洪水分流させる方策が理にかなっている。

水を進める灌漑事業実施の責任者は、上記三原則や川を狭める影響を軽減する方策を提案すべきである。

6. ダラエヌール溪谷の干ばつ対策について

ダラエヌール溪谷の川は雪解け水が頼りで、鉄砲水は出るが安定した河川流量に乏しく、すぐに涸れ川になってしまう。特に下流端に位置するブディアライ村までは水が届かず、昔から井戸やカレーズに頼ってきたが、それも涸れ気味で畑はほとんど干上がり、大半が荒れ放題である。井戸に水があってもタービンのポンプアップに燃料費が掛かるため、土地を捨てて移住する人が増えているとのこと、深刻な状況である。対策は洪水を導水して貯水する方策として、溜め池適地を探したが、今回の調査では時間が足りず全川を見て回ることができなかった。今後の調査に期待したい。

また古くからの用水路は左右とも幅四〇cm・深さ四〇cm程度と小さいので、この用水路を拡幅するか高くすれば、洪水時の導水量を増やすことができ、ある程度下流域まで供給することができる。

7. 沈砂池の排砂方法について

中村先生の沈砂池排砂方法は、排砂口の敷高を低くして沈砂池の水面勾配を強くし、排砂流速を速くして排砂する方法である。PMSスタッフは、この方法をさらに改良した方法を採用していた。

沈砂池内に仕切りを設け、この仕切りの

8. その他の課題について

今回の調査では見て回ることができなかった課題内容は次のとおりであり、次回には予定したい。

- ・ミラーン取水門上流の土砂堆積問題
- ・マルワリードD沈砂池での土砂削減効果の定量化
- ・用水路における水量損失の観測

また、灌漑事業を進めるにあたっては、河川の状態等を把握し、以下の基礎的な資料



農地の荒廃が著しいブディアライ村。(2022年12月28日)

の蓄積が必要である。

- ・雨量観測所をジャララバード事務所、ダラエヌール診療所、バラコット飯場に設置し毎日九時までの日雨量を記録する。
- ・クナール河の基準地点をカマ橋とし、毎年横断測量、月一回の流量観測と洪水時の流量観測を行い、H-Q曲線を作成し、

●現地訪問記③ 事業の継続を確認

PMS元現地ワーカー 石橋周一

現地スタッフとの再会

私は二〇〇七年五月から二〇〇八年四月までの一年間にわたりベシャワール会の現地ワーカーとして、灌漑事業や医療事業に携わりました。

昨年十二月に通訳として事務局の現地訪問に同行させていただき、これが十五年ぶりの再訪ということになります。

ジャララバードのPMS事務所に到着し、まずスタッフたちと抱擁しながら挨拶を交わしました。一人一人の顔を見ながら、熱い思いが胸を衝きます。こちらも年を取った分、彼らもやっばり年を取っています。そして主なメンバーのほとんどが退職せず、今も事業を支え続けてくれています。

彼らが乗り越え続けてきた十五年間の苦

- ・毎日及び洪水時の水位・流量を記録する。
- ・定期的に標高の整合をとった河川の五〇〇mピッチの横断測量を行い、経年的な横断面を作成する。
- ・取水路での流量観測を行い、H-Q曲線を作成し、水位の読み取りから毎日の取水量を記録する。

難に思いを馳せないわけにはいきません。干ばつが続く中で、急な豪雨が洪水を発生させ、そのたびに皆が水路や堰の修復に死力を尽くしてきました。

悪化した治安はなかなか回復せず、二〇〇八年には伊藤和也さんの亡くなる事件が発生しています。そして二〇一九年に中村先生が亡くられました。日本側の私たちも大きな悲しみに包まれましたが、アフガニスタン側の彼らもまた悲嘆に暮れつつ、日本からの支援が途絶えることへの心配も尽きなかったはず。自分たちはどうなってしまうのか、PMSの事業に命と生活を支えられてきた人々はどうなってしまうのか、不安に駆られずにはおれなかったでしょう。

しかし彼らは、中村先生が亡くなられた直後でさえも、用水路工事を放棄せず、手掛けていた作業を再開しました。日本側のベシャワール会も村上会長の下、新体制で現地の支援を再開し、それから早くも三年が経過しました。

干ばつの影響

ジャララバード市街地では以前には見な

かった高層ビルが散見され、店の軒先や住居の屋根にはソーラーパネルが設置されていました。記憶の中の景色と較べて、目に映る農地も増えていきます。水田や、オレンジの果樹園がそこら中で目につきます。

それでも明らかにおかしいのが気温でした。私がかつて勤務していた時分、冬には寒さで震えていました。ところが今では子供たちが用水路に入って遊んでおり、日本より急激に気温が上昇していると感じます。それは干ばつのリスクが極めて高いことを意味し、現に昨年の冬にはPMSは緊急食糧配給を実施しました。

発展しているように見えながら、いつ飢饉に転じてもおかしくない社会です。眼前では農作物が豊かに実っています。しかし街道の反対側に目を向ければ、干からびて放棄された不毛の土地もまた無辺に広がっているのです。

生前、中村先生は自分がいなくても事業が継続できる体制の構築を目指しておられました。

昨年完成のバルカシコート堰は、中村先生が現場にいらつしやらない中で、ディザール技師とファヒーム技師を始めとする現地のスタッフたちが完成させた最初のプロジェクトとなりました。

中村先生がご覧になれば、きっと彼らの奮闘を喜び、また安心してくださったでしょう。

国際社会による経済制裁が続く中、何もかもが以前と同じとはいかないものの、日本

側の支援を受けて、現地のPMSは中村先生の遺された全ての事業を継続しています。

●現地訪問記④ 待ちに待ったアフガニスタンへ

PMS支援室 榎井孝文

目前に紺碧の空が

二〇一七年に現地でも勤務をする職員として入職し、日本で現地会計や広報活動など多岐にわたる仕事をしています。日本での仕事の重要性は理解しつつも、PMS職員から届く現場の写真を見る度に、早くアフガニスタンに行つて中村先生が造られた堰を自分の目で見たい、現地の人と一緒に働きたいという思いが日々募り、今か今かと現地に行けるのを楽しみにしていました。

そして遂に現地への渡航が決定し、十二月二〇日、ペシャワールを経由し、六年待ったアフガニスタンへ。

トルハム国境でパキスタン出国許可のスタンプを受け、鉄柵で囲まれた通路を進みます。奥に進むと通路は二人分程の幅しかなく人がひしめき合っており、所々に検問所があるため、なかなか前にも進めず、後ろの人に押されながらやっとの思いで抜けました。

すると、中村先生の本に書かれていた通

皆様のこれまでの篤いご支援にあらためまして、深く御礼申し上げます。

り、目前には紺碧の空と茶褐色の山々が広がっていました。その景色を見て、今、自分の足でアフガニスタンの地に立っているんだと実感しました。その日は初めての旅路で疲れていたもので、翌日からの灌漑施設視察に備え早めに床に就きましたが、気持ちが悪くならず、しばらくしても寝付けずに朝を迎えました。

中村先生への感謝の念を実感

翌日から灌漑施設の視察が始まり、外に行くときは必ず四、五名の護衛(タリバン)が同行してくれました。アフガニスタンを去る日に、ナンガラハル州の経済局長がジャラバード事務所を来訪し、護衛については治安状況を危惧してつけている訳ではなく、中村先生の一団なので敬意と歓迎の意を込めて手配したとお話がありました。

護衛の人達は険しい谷を登るとき手を取って引き上げてくれたり、巨礫が転がっている道で足元をふらつかせている自分を背負って安全な場所まで運んでくれたりと、常に私達一行に気を配ってくれました。彼らのおかげで身の危険を感じることもなく安心して滞在することが出来ました。厳めしい顔つきとは裏腹に鼻歌交じりに優しく微笑みかけてくるのが印象的です。

灌漑施設を見て回ると、殆どの場所で村の長老達から温かい歓待を受け、彼らの言

葉、話し方、振舞いから、ニュースや新聞記事だけでは伝わらない、中村先生、PMS、日本の支援者に対する心からの感謝の念が直に伝わり、なぜか自分自身も胸がいっぱいになり目頭が熱くなりました。

ある日、ホテルのロビーで雑談をしていると宿泊者から「中村先生の活動に心から感謝している、私たちにお手伝い出来ることがあったら何でも言ってみよう」と突然声を掛けられました。そのときも同じような気持ちになりました。

PMS職員とは常に行動を共にして、言葉が拙いながらも談笑し、一緒にご飯を食べ、絆を深めました。最終日にはスーツケースに入りきれない程たくさんのお土産をもらい、見送りにきてくれたPMS職員達と固い握手を交わし、アフガニスタンを後にしました。



現地で羊の群れに遭遇する筆者。(2023年1月)

●現地訪問記⑤

「あなたたちにガンベリを
見せたかった!」

PMS支援室 山下隼人

パキスタン——ゆるやかに時は流れる

初めて降り立ったベシャワールの町は、空が曇るほどの砂埃が舞い、排気ガスの匂いが鼻をつきました。イクラムラさんに迎えられ駐車場へ向かう途中、通りのあちこちから聞こえる男たちの粗野な大声、通行人を意に介さない無秩序な自動車の往来に、身の縮む思いで歩いたのを覚えています。

その一方で、ベシャワールの人々にとって時間はゆるやかに流れていると感じることもありました。例えば、食事などは急かさないといつまでも出てきません。滞在先のゲストハウスでは、職員の方に「朝食は七時には準備できると昨夜聞きましたが、まだですか」と尋ねました。すると彼は「タックリバン（だいたい）、あと三〇分できると、すでに七時を四〇分も過ぎているにも関わらず、悪びれる様子もなく笑顔でそう答えました。

夕方は早めにキッチンに行き、スタッフのバイジャン（若い兄ちゃん）に「いいキッチンですね。ところで夕食はいつできますか」と尋ねると、「そう、いいキッチンだからこの棚はフォークがあつてここには……」

と、食事の準備はそつちのけ、嬉しそうにキッチンの説明を始めました。私は呆気にとられ、結局催促せずに戻ってしまいました。彼らは非常にのんびりしていて、一分で出来ると言えば四〇分かかり、三〇分で出来るといえれば一時間はかかる。電気は点くし、点かないこともある。お湯はインシャッラー（神の思し召しならば）出るだろうと言う。これはジャララバードでの滞在先のスタッフたちも同様で、現地の気風なのでしよう。日本では苛々しそうな出来事ですが、現地では奇妙な居心地の良さを感じました。

アフガニスタン——「試験」農場の意義

私はPMS支援室で農業事業の担当をしておりますので、主にガンベリ試験農場について書きたく存じます。

農場では責任者のアジュマルジャン（ジャンは親しみを込めた呼称）や職員の方々と抱擁で挨拶を交わしました。アジュマルジャンと直接顔を合わせたのは三年ぶりで、前は日本でした。「ヤマジャン、あなたたちにガンベリを見せたかった!」と大歓迎してくださり、広大な麦畑や果樹園、牛舎や養蜂場など各セクションを案内していただきました。

農業事業は年間の栽培スケジュールや農場全体のメンテナンスの他、公園の拡張やナツメヤシの脇芽の移植なども予定しながら、事業計画に沿って進められます。

アジュマルジャンは広大なガンベリ農場

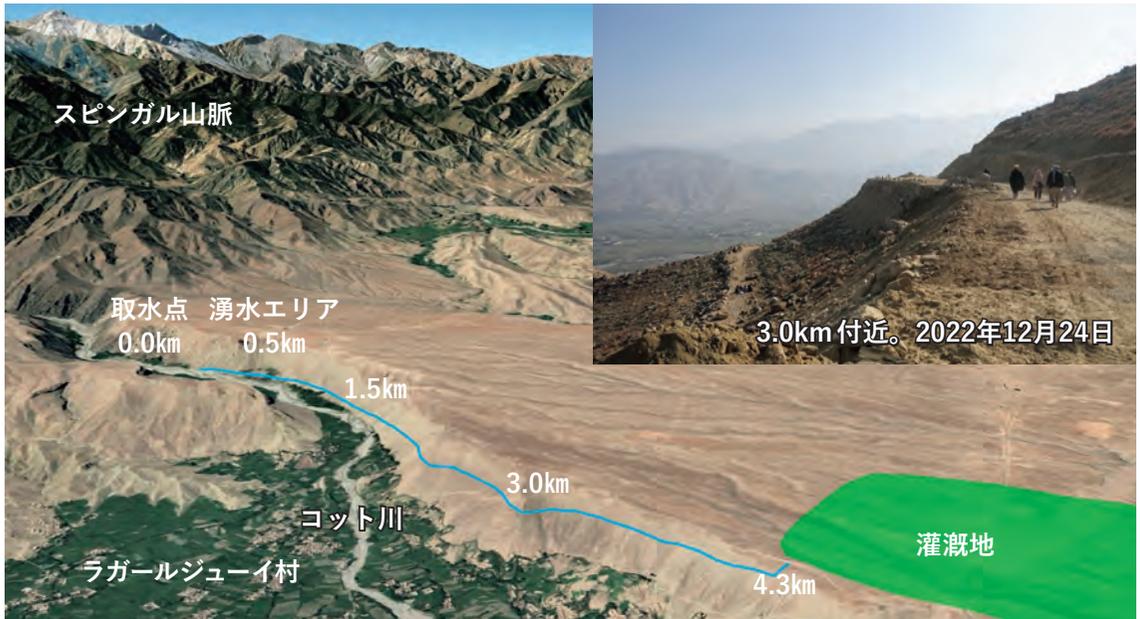
で起きたあらゆることを把握し、また農業担当の職員らと密に連絡を取りながら仕事を進めていたのが印象的でした。

現場では、私が日々現地から受信している日報などから読み取れる以上の仕事が行われていました。各作物は一般的な栽培方法のほか、圃場ごとに灌水の効率化や収量増加のための異なる栽培方法が試みられ、結果が比較できるよう整備されているのです。アジュマルジャンから、過去に失敗した経験や成功した方法、現在期待している圃場などを説明され、大変感銘を受けました。どの作物の種を何kg、何haに植え、何kg収穫できたか。結果だけを見て良い悪いと日本側で評価するのではなく、現場で様々な試行錯誤が行われていることが重要であり、それこそが中村先生の構想された「試験」農場の意義であることを理解しました。今後も現地活動の一助となるよう、精進して参ります。

▼現地活動を紹介するパンフレットをお送りします

*ベシャワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです（払込用紙がついています）。ご希望の方は事務局にご連絡下さい。パンフレットはA3変形を四折りましたので、長形の定形封筒に入るカラー版です。なお、パンフレット、会報等は受け取る意思のある方への配布を原則としております。（ポスティング等は御遠慮下さい）

バラコット用水路、崖掘削作業を完了



2022年10月中旬に水路末端から崖の掘削が始まり、2023年2月上旬に取水点までの交通路が開通した。今後は取水点で堰と護岸工事、湧水エリアで導水部建設、4.3kmの用水路造成が進んでいく。



日本が寒波に襲われた1月下旬、アフガン東部も雪に見舞われ、視界が悪く中で用心しながら切土を続けた。現在、切り拓いた交通路に用水路を造成中。



現場近くに借りた宿舎兼事務所にて。日本からの視察団の情報を聞きつけ、村の長老たちが挨拶に訪れた。PMSの仕事に感謝を述べつつ、ペシャワール会のメンバーを前に、ドクター サーブ ナカムラへの想いをこめた詩を詠む。

——中村医師の活動の原点 ペシャワールへ——



1984年、中村医師が最初に赴任したパキスタンのペシャワール・ミッション病院の旧ハンセン病棟。小屋のような病棟だったものを、中村医師が建て直した。現在ハンセン病診療は行なわれておらず、現院長の専門である眼科診療が中心となっている。(2022年12月16日)



TMS 院長

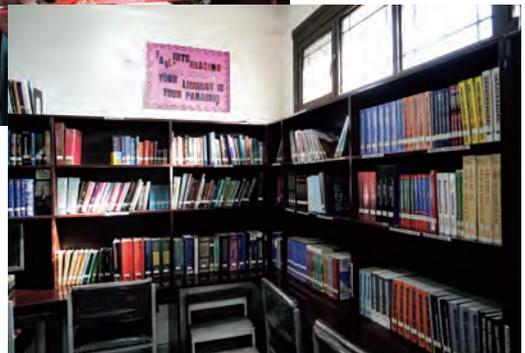
イクラム元 PMS 事務長

↑ ペシャワールの TMS 病院 (旧 PMS 病院) では、中村医師の名前を冠した図書室 (Dr. Tetsu Nakamura Memorial Library) のオープニングセレモニーが行われた。イクラム元 PMS 事務長、TMS 院長らとテープカットをする村上会長。

(2022年12月17日)

→ 図書室は日本人ワーカーたちの居住スペースだったところに開設された。学生のための参考書や医学書が並んでいる。

(2022年12月17日)



◎アフガニスタンにて◎



2023年度に計画されているFAOとの共同事業の候補地、クナール州ヌールガル地区。大和技師（右）、PMS技師、地域住民が情報共有をしながら実際の現場で協議をする。（2022年12月26日）



ダラエヌール渓谷の灌漑用井戸。PMSが掘削した13基のうちの1基で、現在も周辺の田畑を潤している。この地域は干ばつの影響が著しく、PMSが掘削した他の飲料用・灌漑用井戸やカレーズ（アフガンの伝統的な横井戸）はほとんど涸れていた。（2022年12月28日）

* 中村先生 雨ニモ負ケズ *

— 形を変え、流れ続ける。アフガニスタンでの源流をたどって —



「緑の大地計画」発足からちょうど10年の頃。ますます灌漑事業が忙しくなる中、久々に活動の源流であるダラエヌール診療所を訪れた中村先生。手狭になっていた診療所の増築工事の折に、20年来の仲間達を激励訪問。“いつもの作業着”の上からまとった白衣が「似合わなくなってきた」と本人のコメント。

(中村医師メール報告より 写真：2013年2月9日)



[上] その10年後、日本からの視察団を歓迎する医療チーム。中には30年選手も。地域で重きをなしてきたこの診療所は、1991年開設当初に比べ交通アクセスが格段に向上した。より広い受け皿としての役割も求められており、視察中にはさらなる増築計画について話し合われた。[左下] 事務局に寄付されていた絆創膏のおみやげを手渡した。[右下] 以前、中村先生がベシャワールの住まいで使っていたお手製の本棚を診療所に移設したもの。今でも薬棚として現役だ。(写真：2022年12月28日)

●現地訪問記⑥

風景は一変していました

ペシャワール会事務局 藤野洋子

三回目のアフガン訪問

昨年十二月の現地視察訪問に同行しました。アフガニスタンに入るのは三回目です。最初は二〇〇三年三月、ペシャワールのPMS病院で会計の手伝いをしていました時、マルワリード用水路の鍬^{くわ}入式^{いれ}に行きました。二〇〇〇年頃からの干ばつが進み、どこにも緑はなく、人影もない荒涼とした荒野が広がっていました。

二回目は二〇〇七年、第一期工事が完成し、竣工式出席のため事務局から後藤前会長他数名で訪れた時でした。用水路の水で麦が育ち、スランプール平野は近くの山から見下ろすと一面の緑で、避難先から帰って来た村人によってきれいに区画され植樹もされていました。

その日から第二期工事が始まり、ガンベリ沙漠までの中村先生のご苦勞は、先生から送られて来る週報や帰国された時の報告会で知ることができましたが、今回現地を訪れて取水口からガンベリまで車で走り、あらためて二七kmという長さ、途中のいくつもの難工事を中村先生、日本人ワーカー、PMS職員、作業員の村の人々が力を合わせて乗り越え、完成されたのだと実感しました。用水路に水が流れ、畑が復活してから約

笑顔の子どもたち

二〇年経ち、風景は一変していました。家が建ち並び、各村々にバザールができ、色々な野菜、果物が並んでいました。痩せていた家畜も太り、牛、羊、鶏肉を売る店もいくつもありました。四つ辻では、人々の往来が多く、車が通り抜けられない程でした。

小学校の下课時間でしょうか。バッグを持った子ども達が楽しそうに道に出て来ました。干ばつの時も現地の子どもたちは良い笑顔でいると、中村先生は言われていたのですが、今は、家族と共に飢えることなく食事ができ、いつ飛んで来るかわからない爆弾や銃声に怯えることもないので、本当に楽しそうに笑っていました。

タリバンが政権をとってから随分治安が良くなったとのこと。色々問題はあると思いますが、数十年の間、戦争と干ばつの中で生きてきた人々に、この平和な時が続くようにと願わずにはいられません。

アフガニスタン全土で干ばつは続き、PMSが手がけた灌漑設備による耕作可能地域は全土の約二%とのこと。また、診療所のあるガラエヌールでも干ばつが進んでいます。今までPMSが手がけていない新しい地域での水路建設候補地も見えました。少しずつPMS方式の用水路が他地域に拡がればと思います。

最後になりましたが、今回事務局の会計担当として行きましたので、少しだけ報告します。

「菜の花基金」最終報告

2022年12月にアフガニスタンを訪問し、中村哲医師、そして伊藤和也君の慰霊の旅としました。2023年2月13日、伊藤家より、「菜の花基金」から前回の822万円に加えて新たに60,303円をご寄付いただきました(総額3,028万円余)。「菜の花基金」とPMSをご支援いただいた皆様に厚く感謝申し上げます。ガンベリ農園ではこの基金で購入した大型のトラクターが230haの農園で立ち働いていました。和也君が丹精込めて育てていたサツマイモも幾多の困難を越えてこの地に根付きました。干ばつの広がるアフガニスタンで、PMSの活動地域では人々の生活が昔と同じように営まれています。この成果をもって伊藤和也君の魂に供えさせていただきます。(ペシャワール会会長 村上優)



スケジュールの関係でジャララバードの会計室を見学しただけですが、部屋の中は整頓されていて、ファイル類が棚に整理されています。朝のミーティングでは最初

◎現地スタッフからの便り

訪問を大歓迎しました

ジャララバード事務所責任者

アブドウルサーブルサダット

再会の喜び

私はアブドウルサーブルと申します。PMSの職員として二〇年以上にわたり様々な職務に就き、現在は事務部門の責任者を務めております。この組織で実に多くのことを経験してきました。中村先生が亡くなられてから、PMSの各事業の動画、写真を撮影して日本の本部へ送るといふ、もう一つの任務が課せられました。それは私たちPMSへ活動資金をお寄せいただいている方々へのご報告のためであり、資金が適切に、アフガニスタンの人々の生活を良くするために使われていることを、知っていただくためです。

昨年、日本の事務局の方々がこちらへ来られると聞いた時には大変嬉しかったもの

に購買担当者が当日の購入予定や物価などを報告し、協議が行なわれ、一日の仕事が始まります。皆様のご寄付が大切に使われていると感じました。

です。

十二月二〇日、現在一緒に働いている方々、以前働いていた方々の八人がトルハム国境を越えられました。その姿が目に入った時、私たちは喜びに満ちあふれました。皆さんとジャララバードへ同行する道中はとても幸せに感じました。

ジャララバード市街に到着すると、PMSの事務所へ直行して、まず昼食。その後、会議を開き、今回の滞在中に行うべき事項を話し合いましたが、日本の方々もアフガンの職員たちも大変久しぶりに再会出来たことを互いに喜び合っていました。

用水路や農園を視察

翌日はゴシュタ郡へ行って用水路の建設候補地を視察し、大和技師から取水口と用水路を建設するにあたっての提案をいただきました。続いてカマ第一堰と第二堰の視察を終えて、すぐ近くにあるPMSミラーン事務所へ遅い昼食をとってからジャララバードへ戻りましたが、もう夕方になっておりました。この日は事務所に寄らずご一行を宿へ送りました。

二二日、私たちはカシマバードの取水口へ行き、大和技師と私どもの技師たちが互いに意見を交わしつつ、沈砂池からの排水路がカブルル河に合流するまでの全貌を視察しました。その後にガンベリ農園へ。広大な農園内を歩きながら、私たちが育てたサトウキビ畑や、豊かに実っていたオレンジの果樹園を見て回り、農園で刈り取ったサトウキビの搾り汁を煮詰めて黒砂糖を作っている所を見学しました。ご一行は釜で煮詰めた後で冷ましている状態のものを味見されました。黒砂糖は作業員たちの手で丸められ、バザールに出荷するのです。

ドクター中村記念公園での昼食後、畜産場の視察を済ませ、ジャララバードへ戻りました。

二三日は週休の金曜日でしたが、予定されていたJICA、FAO、PMSのオンライン会議が開かれ、ヌールガルとゴシュタにおける事業計画について協議いたしました。

翌二四日には、上記の事業計画の候補地としてディダール技師が挙げていたロダット郡を訪問しました。さらにその日は現在建設中のバラコット用水路現場を視察し、日本の方々は当事業の順調な進捗に感心しておられました。地元の人々が日本から来られた方々を歓待、贈り物も用意しており、日本の皆様も感謝しておられました。

二五日はバルカシコート、カシコートを訪問してから、ミラーン事務所まで昼食いたしました。

二六日、取水口建設が検討されているヌールガル地区を訪問。ここではクナール州の技師も交えて現場を視察して互いに意見を交わしました。

その後、マルワリード用水路D沈砂池およびH区近傍の谷を視察。また、二〇二一年から水不足が顕著になってきたダラエヌール渓谷の上流に位置するシュキアライ村の視察をしました。そして渓谷にあるPMSのダラエヌール診療所の屋上で、医療スタッフたちと楽しく昼食をとりました。診療所の職員たちは日本からの訪問を大変喜び、心から歓迎していました。

二七日、再度バラコット地区を訪問し、取水口と堰の建設予定地を念入りに観察され、大和技師は私どもの技師に幾つか助言をくださいました。

ダラエヌール診療所や渓谷を見学

二八日、改めてダラエヌール診療所を訪問。診察室、ワクチン室、処置室、検査室、

薬品庫等々全ての設備を視察してから、医療の職員たちと意見交換をしました。診療所からの帰りに同渓谷のソリジ村とブディアライ村でPMSがかつて掘削した灌漑用井戸と、修復したカレーズを見学しました。ブディアライ村では干上がった農地が多く、カレーズも涸れていました。最後に、ガンベリ農場へ移動してドクターサーブ中村記念塔の横の農園を農業責任者の案内で視察されました。

医療体制の強化・拡大を

ダラエヌール診療所医師
ハフィズラーカニ

診療所の日常業務

ペシャワール会の皆さま、こんにちは。

二九日、ナンガラハル州灌漑局の方々へ、PMSの活動への理解と協力に対して、ペシャワール会からの感謝状が贈られました。その後、ご一行のうちの五名が帰国のため出立されました。残る三名の方は一月四日までジャララバードに滞在し、用水路や農業事業の現場及びジャララバード事務所の各セクションの視察を継続されました。皆様とまたお会いできます機会を心より願っております。

私はPMSの職員で医師のハフィズラーカニと言います。二〇〇五年からPMSに勤めています。今日はダラエヌール診療所の日常業務と去年の出来事について書きます。ご存知のように私たちの診療所は外来患者の診療のみを行う、BHC(ベーシックヘルスセンター)ですが、その他にもさまざまな活動をしており、そのことについても以下に記します。

ダラエヌール診療所では患者に保健教育

中村哲医師の著作等

(価格は税込)

アフガン・緑の大地計画

Peace (Japan) Medical Services & ペシャワール会
B5判並製・256頁・オールカラー 1700円

好評発売中!

わたしは「ゼロ弾きのゴーシュ」

中村哲が本当に伝えたかったこと 1760円

天、共に在り 1760円

アフガニスタン三十年の闘い、
NHK出版 東京都渋谷区宇田川町41-1
☎03(3464)7311

希望の一滴

中村哲、アフガン最期の言葉

A5判192頁オールカラー 1650円

西日本新聞社 福岡市中央区天神1-4-1
☎092(711)5523

アフガニスタンで考える

～国際貢献と憲法九条～ 726円

人は愛するに足り、真心は信ずるに足る アフガンとの約束

中村哲／澤地久枝(聞き手) 1078円

岩波書店 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
☎03(5210)4000

医者、用水路を拓く 1980円

ペシャワールにて 1980円

ダラエ・ヌールへの道 2200円

医は国境を越えて 2200円

医者 井戸を掘る 1980円

辺境で診る 辺境から見る 1980円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
☎092(714)4838

ほんとうのアフガニスタン

1650円 光文社

文京区音羽1-16-6 ☎03(5395)8116

医者よ、信念はいらないまず命を救え!

1980円 羊土社

千代田区神田小川町2-5-1 ☎03(5282)1211

アフガニスタンの診療所から

814円 ちくま文庫

台東区蔵前2-5-3 ☎03(5687)2680

映像記録DVD

荒野に希望の灯をともす

～医師・中村哲の35年の軌跡～

[2021年発売] 2970円

アフガニスタン [16年発売] 2970円

用水路が運ぶ恵みと平和

アフガニスタン [12年発売] 2750円

干ばつの大地に用水路を拓く

[企画]ペシャワール会[製作]日本電波ニュース社



視察団に診療所の業務を説明するハフィズラー医師。(22年12月28日)

を行なっています。

結核患者及びコロナの疑いがある患者は他の患者から隔離しています。

午前中の一般診療時間は毎朝八時から十二時半。勤務医はドクターサブハミドゥラーと私の二人です。

外来では無料で以下の医療サービスを提供しています。

- (1)母子衛生・産前産後のケア、家族計画指導および出産。助産師一名、助手一名。
- (2)ワクチン・五歳以下の幼児と出産年齢女性が対象。ワクチン接種担当者二名
- (3)検査・ルーチン検査および結核の疑いのある患者の喀痰検査。検査技師二名。

(4)薬局・同診療所では良質かつ十分な量の薬剤使用を保持。

(5)看護・あらゆる看護処置(注射、創傷の手当、小手術、他)が出来る看護師が在勤。

(6)二四時間診療体制。

二〇二二年の出来事

診療所では二〇二二年に以下のような出来事がありました。

- (1)年初にナンガラハル州六郡で栄養失調児と妊産婦を対象に食糧配布プログラムを実施。一郡あたり食糧パッケージ(小麦粉五〇キロ、米十二・五キロ、調理油五リットル、豆三・五キロ)三〇〇セットを配布。

(2)診療所内に男性専用の待合室を設置。

(3)国際救済委員会(IRC)が当診療所用に五kWのソーラー発電機を設置。

最も重要な出来事は十二月二〇日に日本からPMS支援室メンバーなど八名が訪問され、PMS事業を視察されたことです。

当診療所には十二月二六日と二八日の二回お見えになり、二回目は診療所の全ての部門をご覧頂きました。

ジャ医師、サブブルジャン、ディダール技師もジャララバード事務所から同行し、昼食後に全員で会議をもちました。

同会議では当地での医療サービスの必要性を互いに理解しました。BHCレベルの医療サービスでは不十分で、可能であればCHC(総合保健センター)あるいはDH(郡

病院)へのアップグレードを住民が希望していることを共有しました。同地域の住民は貧しく、治療を受けるためにジャララバード市まで行くことは難しいため、皆様の寛大なご支援がいただけるなら大変ありがたいのです。

ドクターサブ村上とシスター藤田は我々の要請を受け入れ、診療所のアップグレードを約束して下さいました。ただ現在の診療所は手狭なため、CHCレベルのサービスを提供することが出来ません。そこで診療所に隣接する土地を購入して拡張する計画で、土地所有者との協議を早急に行うということになりました。

最後に、ひとりのアフガン人として、ベシャワール会の皆さまが、尋常でない状況に置かれている私たちに対し、医療だけではなく農業や灌漑という分野で支援の手を差し伸べてくださっていることに、心からお礼を申し上げます。そして私自身、この人生の終わる日までPMSでの任務を誠実に遂行することをお約束いたします。

皆様のご健勝をお祈りするとともに、今後ともご協力をいただければ幸いです。

▼未使用の切手、書き損じハガキ(官製ハガキ・年賀ハガキ)をお送り下さい

*引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使用させていただきます。なお、外国の切手は取り扱っておりません。

中村哲医師アーカイブ(随時掲載)

*「週刊エコノミスト」(一九九〇年十月二三日)

アジアの同胞としての目の高さを失わず、 現地と苦楽を分かち合う

中村哲

外国人の干渉への苛立ち

アフガニスタンは、あらゆる意味で日本から遠い国である。一九七九年のソ連軍のアフガニスタン侵攻と、それに続く西側各国のモスクワ・オリンピックのボイコット、六〇〇万人に上る難民流出は、当時、世界の注目を集めた。しかし、ソ連IIカブール政府軍とムジャヘディン・ゲリラとの死闘と一〇〇万人以上の犠牲という歴史的事実をよそに、アフガン問題は次第に人々の記憶から薄らいでいった。

再び人々にアフガニスタンの記憶をよみがえらせたのは、一九八八年四月、米ソ主導のジュネーブ和平協定の妥結とソ連軍撤退開始である。その後、パキスタン大統領ジアウル・ハクの爆殺事件、軍事政権の倒壊、ベナジル・ブットによる人民党政府の誕生と、目まぐるしく変わる情勢に世界は注目した。

しかし、これはやがて噴出する世界秩序再編成の前奏曲にすぎなかった。ベルリンの壁の撤去やルーマニアの政変など、劇的

な東欧の動きやアラブ世界の動乱に世界の耳目は引きつけられ、再びアフガン問題は片隅に追いやられたかのように見える。

だが、デタント(緊張緩和)の動きに沸き返るヨーロッパ諸国への関心をよそに、多くのアジアの発展途上国では何が起こりつつあったのだろうか。

一九九〇年五月、酷暑の到来と共に、パキスタンのベシヤワール周辺のアフガン難民キャンプでは、一つの転換期を告げる事件が続いていた。文字通り暑い夏の始まりであった。十一年余に及ぶ長い難民生活に疲れはてた人々の間に、外国人の干渉に対する苛立ちが強まりつつあった。同時に、デタントの煽り(煽動)を食らったパキスタン自身も「前線国家」としての意味を失い、次第に混沌の度を深めつつあった。

かつて一九八六年ごろまで、アフガニスタンの内乱は、強大な侵略者に果敢に立ち向かう素朴な民衆のレジスタンスの顔があった。そこには、理屈を超えてわれわれに感銘を与える何物かがあった。

しかし、米国の、レジスタンス側への本

格的な介入は、アフガン紛争自体を、まるで超大国どうしの代理戦争のような様相に転じさせ、続く米ソ和解による一九八九年二月のソ連軍の撤退後は、抵抗勢力内部の政治権力闘争が激化して、ムジャヘディン・ゲリラ組織の戦闘員も傭兵化していた。アフガニスタンは、今や、内部にとどまる者も難民となった者も、ずたずたに引き裂かれていく。

パキスタンに釘づけにされた三二〇万人の難民たちも、「宿敵オロース(ロシア人)」が引き揚げた現在、党派の戦いに動員される意味を疑い始めていた。外国人の干渉に苛立ちを覚える心情が難民たちの間に広がり、その鬱憤の矛先は、外国のNGO(民間援助団体)にも向けられた。欧米系の団体に対する度重なる暴動・略奪事件の発生である。

まず槍玉にあげられたのは、外国人による「戦争未亡人の世話」をするプロジェクトであった。

四月二六日、ベシヤワール市内のナセルバグ・キャンプで暴動が発生、ムッラー(イスラム僧)に扇動されたアフガン住民約一万人が、キリスト教系NGOであるSN I (Shelter Now International)の施設を襲撃、略奪の限りを尽くした。

これによって同団体のプロジェクトは壊滅活動の閉鎖を宣言すると共に、カナダや米国大使館を通じて「パキスタン連邦政府の管理不行き届き」に抗議した。パキスタン連邦政府難民コミッションナーは、表向きは

遺憾の意を表明したが、事実上無視した。

同様の事件は、周辺の難民キャンプに次々と飛び火した。一九九〇年五月には、I R C (International Rescue Committee) などの主要欧米団体が襲われ、S N I の指導者の暗殺未遂事件が発生した。アフガニスタン本国内でも、フランスの M S F (国境なき医師団) が追放され、一部は殺害された。こうして一〇〇以上に上る外国救援団体は、撤退あるいは規模縮小を余儀なくされ、ソ連軍撤退後の「難民救済」・「復興援助」ラッシュの狂宴は終息に向かっていている。

“犬”扱いられた難民

欧米 N G O 側では「犬でさえも何年も世話になった恩を忘れぬ」との言葉を用いて反応し、彼らの援助哲学の低劣さを暴露した。そこには、難民を犬以下呼ばわりし、現地事情や人々の習慣や心情を理解できぬまま独り歩きするプロジェクトのグロテスクな肥大、騒々しい自己宣伝、西欧的な価値判断の絶対化とが見られるのみであった。米英のジャーナリズムの論調の多くも「恩知らず」とするコメントに変わりはなく、背後にイスラム・ファンダメンタリズム(原理主義)の影響を示唆するものであった。

これは、あまりの認識不足と言わねばならない。それに、イスラム原理主義勢力をソ連への対抗勢力として軍事援助してきたのは、ほかならぬ米国であった。過激なイスラム原理主義が反米的要素を孕んでいる

ことを知りつつ、あえて彼らは武器援助を行なったはずである。一九八四年八月の米国議会決議による膨大な武器供与は、アフガニスタンの荒廃とパキスタンの治安の悪化に十分貢献した。彼らにとって現地住民は、世界戦略遂行のための将棋の駒にすぎなかったのである。

英国統治時代を彷彿させる、この傍若無人のマキャベリズムこそが、現在の中東世界の混乱の一大要因を成していると言える。もちろん、駆けつけた N G O の大部分に悪意はなかったであろう。しかし、彼らは本当に現地住民の立場を理解していたであろうか。イスラム社会において女性の問題は極めてデリケートである。狙い撃ちにされた欧米 N G O のプロジェクト「身寄りのない寡婦の世話」や「女性の教育と地位向上」は、確かに自国では受けたであろうが、アフガニスタンの伝統社会をみくびっていた。公衆の面前で男女が抱き合っても平気な西歐人たちが「未亡人の世話」をするのであれば、イスラムの風習をかたくなに守り続けるアフガン人たちにどう映るであろう。

いかに不合理に見えても、そこにはその文化的アイデンティティがある。ほかならぬソ連⇨カブール政権が女性解放を説き、急進的な近代化を強要して猛反発をくらし、内乱のきっかけを成した事実を彼らは忘れたのだろうか。性急に自分たちの価値尺度を押しつける点では西側もソ連と同じ対応をしたわけだ。そのあげくが、各国

政府を通じた国際的な恫喝であった。パキスタン政府関係者がおそらく内心「内政干渉」だと黙殺したのは、当然とも言えよう。ベシヤワールでわれわれが目にしたのは、援助という名の干渉、低開発国に対する配慮のなさや優越感であった。「世界秩序の再編」とは、底辺のアジア諸国にとっては干渉と圧迫であり、混乱の別の形態にすぎない。二〇〇万人とも言われる犠牲と国土の荒廃、收拾のつかぬ混乱に誰がどう責任をとるのか。

米国がもてはやす、パキスタンの「民主政権の誕生」も、一九九〇年八月、わずか二年を待たずに崩壊し、アフガニスタンの混乱は形を変えて、パキスタンに輸入されているようにさえ見える。各国による難民援助、アフガニスタン復興支援の騒ぎは終わり、外国人は徐々に引き揚げ始める。U N H C R (国連難民高等弁務官事務所) は、二五%の予算大幅削減を公表した。

間接的に、これら欧米 N G O と国連の大口スポンサーにさせられてきた日本政府は、すでに難民援助の見直しを始め、W F P (世界食糧計画) や U N I L O G (国連補給部) を中心に、アフガニスタン内部の支援に力を入れようとしているが、これは当然の結果とも言えよう。

我々はこの動きを歓迎する。最近、国境沿いの地帯では難民帰還の動きが静かに始まっているが、これは復興援助の結実ではなく、むしろ援助停止による平和の結実だ

からである。例えば、派手に喧伝された国連による地雷撤去のプロジェクト、「オペレーション・サラーム」にしても、当の現地住民の方が処理方法をはるかによく熟知していた。復興援助は、外国人のお祭り騒ぎであったといっても誇張ではない。

地についての根からのアジア理解

実は、アフガニスタンの復興はこれからののである。我々JAMS (Japan-Afghan Medical Service) は、一九八六年以来、小規模ながら現地にとどまって活動を続けているが、現場を無視した欧米各国の援助プロジェクトを苦々しく見てきた。

アフガニスタン難民は、これら外国人に活躍場所を提供するために存在しているのではない。彼らが求めているのは、干渉なき平和であり、彼らの立場に立った村おこしと国土再建である。

われわれJAMSチームは総勢四〇人という小さな所帯ではあるが、日本の民間の良心を結集し、荒廃した国土を医療側から担おうとしている。スタッフは数人の日本人を除いてすべてアフガン人である。それは、われわれが外国人による干渉や押し付けを徹底的に排除して、アフガン人によるアフガン人のための活動を重視するからである。JAMSの活動目的は、長期的展望で現地の人材育成に力を注ぎ、無医地区でのモデル診療態勢をアフガニスタン北東部山岳地帯につくりあげることである。戦後の村

おこしに向けた医療側からの協力である。だが、それには長い長い年月と試行錯誤、根気のいる相互の異文化理解を要する。壊滅したアフガニスタンの農村は数千に及び、国土の半分がベトナム戦争に匹敵する爆弾によって焦土と化したと言われる。われわれのチームが国境地帯で見た惨状は、ほとんど正視に堪えぬものであった。この復興には十年、二〇年、あるいはそれ以上の時間を要するであろう。

「業績」に縛られぬわれわれは慌てない。徹底して、アジアの同胞としての目の高さを失わず、いかに非効率に見えても自力更生援助を鉄則とし、傍らから見守る方針を貫いている。そして、これを日本から支える主力が、病院組織からサラリーマン・主婦・学生層に至るまで広がる、個々の動機に基づく日本の良心の底力である。

われわれは、長期にわたって現地と苦楽を分かち合いながら、黙々と活動を継続するであろう。そうしてこそ、地についての根からのアジア理解と、利害を超えた真の友好が芽生えるものと確信するからである。欧米各国NGOが浮足立つ中で、JAMSは着実にその活動を拡大しつつある。日本側からの補給態勢を強化しつつ、一九九〇年八月には、アフガニスタン北東部ににらむ地域に支部を置き、流動する情勢の中で待機している。

「アジアの辺境・ペシャワール」から見ると、デタントや自由化を屈折した気持ちで

眺めざるを得ない。たまたまドイツから帰任したばかりの同僚のシスターは、そつがなく、しかし正確に東欧とドイツ情勢のコメントをした。

「現在のオイフォリー（多幸状態）は、やがて別の苦悩に置き換わる。何度われわれは歴史に欺かれてきたことだろう。第一、だからアフガニスタンやパキスタンはどうだっというの。同じことだわ……」

ゴルバチョフ自ら公言する「社会主義の死」とは、宿敵を失ったカネ社会の国際的膨張である。ペレストロイカを含めて、彼らのいう世界新秩序とはヨーロッパ新秩序である。多くのアジア諸国にとって国際化とは西欧的近代化であり、伝統社会に破壊的に作用する。それは、カネ社会に特有な野放図な商品化と欲望の解放、西欧的な非個性化を意味する。

「社会主義の神話の崩壊」を笑うことはたやすい。さらに、欠陥だらけのアジア民族主義の変質を批判するにも、材料にこと欠かない。だがしかし、いかに野蛮で無駄なあがきに見えても、私は、アジアの伝統社会の抵抗と、少なくとも理想として掲げられてきた「底辺からの平等」への希求を笑いきることができない。かつて欧米の植民地支配下に呻吟したアジア諸民族の希望のシンボルは色褪せたといえ、その根底にある、もの言わぬ民衆の情念を我々は理解せねばならないであろう。

アジアにはアジアの、それぞれに異なる独

自性と価値観がある。最近の日本では、「進歩的な識者」さえ「狭い地域主義の弊害」を説き、あたかも国際化が文化的な異質性を放棄したところに成り立つような錯覚を与える向きもある。コメ市場開放の論議にしても、上から下まで、詰まるころは経済効率論が主調をなしている。われわれのアジアへの愛着も、コメへの執着も、時代錯誤の郷愁や旧習墨守の地域主義として葬り去られかねない時代となった。

日本の危機とアジアの危機

今、ベシャワールから世界と日本を見る時、われわれもまた、一つの時代の転回点に突入していると思われる。戦争が、一つの極端な外交手段とすれば、経済的超大国日本の援助もまた、強大な軍事力にも匹敵する影響力を強めつつある。国際援助の質が問われる今、ヨーロッパ新秩序の動きに惑わされることなく、「アジア新秩序」を、そしてそれを通して真の「地球新秩序」を求め、アジアの同胞への生きた理解と相互扶助へ独自の模索が始まることを心から祈る。すべてが、目先の経済効率やカネで済むとは限らない。われわれが売り渡してはならぬものもある。叫ばれて久しい「東西問題から南北問題へ」というスローガンは、今こそ陳腐な死語ではなく、日本を蝕みつつある拝金主義と交差する。日本の危機とアジアの危機は一体であるように思えてならない。

中村哲先輩から広がった世界

福岡高校ベシャワール班三年

へんみさら
邊見紗来

「医者なのに、用水路を作った人がいたんだ」

私は中村さんが銃撃事件で亡くなった時初めて彼の存在を知り、当初はそんな印象を持っていました。しかし、中村さんの母校である福岡高校に入学し、学んでみると、もつと他に注目すべきことがたくさんありました。今の私が思う、中村さんの最もすごいところは、当たり前のことを当たり前以上に行動していたことです。例えば、人々の伝統や文化を尊重し、優劣をつけないこと。目の前に困っている人がいたら、助けるために最善を尽くすこと。武力では何も解決しないという考えを貫き行動していたこと。私たちは自然に生かされているということに感謝すること。このような当たり前に思えることを、一貫して持ち続けることは本当に大変なことです。中村さんはそれができたからこそ、人々の信頼を得て、支援の輪が広がったのだと考えました。

中村さんの考え方を、福岡高校の後輩たちをはじめ、多くの人に伝えたい。そのよう



福岡高校ベシャワール班のメンバー（2022年5月）

な思いで二〇二一年、高校に「ベシャワール班」を立ち上げました。活動をしていく中で、本当にたくさんの人に出会うことができました。まず、一緒に活動を進めたベシャワール班のメンバー。藤田看護師はじめベシャワール会事務局の方々、映画監督の谷津さん、報道陣の方々。九州大学の学生さん、全国の大学生や中学生の仲間。ベシャワール班の活動をサポートしてくださる方々。こんなにもたくさんの方と思いを共有し、新たな発見を得ながら、活動を進めることができ、本当に貴重な経験となりました。

今、私たちができることは、ベシャワール会やアフガニスタンの今を知り、少して

表紙写真によせて

ある日のバラコット工事現場

いつものPMS方式とは異なる手法、新たな挑戦。日本の感覚では灌漑効果の割に大それた危険な工事。しかし彼らには突き進む理由がある。長年の干ばつと戦乱によって、この地域の人々は非常に貧しく、十分な食べ物も職もない。

着工前のオンライン会議。「PMSはそもそも医療団体なのだから安全第一で進めるように!」半分冗談、半分心配を含んだ日本側からのゴーサインに、彼らは笑って応えた。

4カ月後、そびえる崖を切り拓く最も厳しい工程が、無事完了した。ファヒーム技師が作業員を労い、今後の水路工事に向けて皆を鼓舞する。現場を束ねる彼の姿をみて、以前、中村医師が日本へ送った報告書の一節が浮かんでくる。

“水利施設が設計図とアイデアだけでできると思っている人はいませんか。寒風と冷雨をついて、働く人々が居てのことです。(中略)ここでは、人間は戦い、働くアリなのだ。実を重んずる気風は、労働から生まれる”(2013年11月)

技術書には書き記されていないもう一つのPMS方式が、そこにあるようだ。

今、現場では多くの地元の村人が働いている。この戦いがやがて果樹園をつくり、実をつけるその日だけ目指して。

水は流れてくれるだろうか。遠く離れた日本の室内で、体を動かさず心配ばかり繰り返す。

私が所属しているベシャワール班は、邊見先輩が福岡高校で立ち上げた、まだまだ歴

繰り返し発見する中村医師の魅力

福岡高校ベシャワール班一年

古賀翔一郎

も支えることだと思えます。これを読んでくださっている方々は、私の何倍も、それをしてこられた方々だと思います。私は高校を卒業した後、たくさんの人に出会い、

ベシャワール会を微力ながらも支えていきたいです。皆さんといつか出会えることを本当に楽しみにしています。(二〇二三年二月記)

史の浅い団体です。中村医師の母校である福岡高校で、お人柄や考えを生徒や地域の方々に伝える活動を行っています。私はベシャワール班に所属して間もないころ、中村医師の著書や藤田千代子さんのお話から中村医師の活動について学び、そのすごさに衝撃を受けるばかりでした。それから今までの活動を通じて、中村医師について知ったつもりでも、更にいろいろなお話を聞いているうちにまた新たな魅力を発見する

PMSの動き

11月7日～12月20日 マルワリード用水路I区から3kmのライニング工事。

12月20日～1月2日 マルワリードII堰上流の河道整備。

12月20日～1月4日 ベシャワール会からの視察団を案内。

1月14日～1月23日 シェイワ堰上流の堆積土砂の浚渫作業。

2月4日 バラコット事業、灌漑予定地から取水地点までの崖掘削完了。

▼寄付をしてくださる皆さまへ

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますようお願い致します。

この繰り返しです。このように、一人の人間についての発見が絶えることがないのは、中村医師が奥深い人間性を持っておられるからであり、それこそが中村医師に惹きつけられる理由なのだと思います。福岡高校は長い歴史を持つ高校ですが、中村医師の活動を引き継いでいく伝統は生まれたばかりです。邊見先輩が作ってくれた伝統を福岡高校の伝統にできるように、これからも活動に取り組んでいきます。(二〇二三年二月記)

●事務局だより

*今号は、アフガニスタン視察の特集です。初めて現地を訪れた支援室のメンバーは、アフガンの自然と人の営みのスケール感に圧倒されたようです。ホームページでは今回の視察報告シリーズを掲載しており、ガンベリ農場の写真などもアップしております。どうぞご覧ください。

視察中の十二月二四日、タリバン政権は、女性がNGOで働くことを禁止しましたが、医療団体は例外のようです。PMSでも医療職としてダラエヌール診療所で女性が従来から就労しており、現在も変わらず、元気に働いています。

*ベシヤワール会は一九八三年に発足、今年で四十年になります。発足当時には生まれていなかった世代が中村医師の偉業を伝えようと活動しています。母校である福岡高校の後輩たちばかりではありません。中村医師が度々訪れ、PMS灌漑方式のモデルとなった山田堰がある福岡県朝倉市の大福小学校では昨秋、劇と歌で中村医師を称えました。小学生が作詞した歌詞の一部を紹介します。♪中村哲さんを知っていますか(略)今もあなたの、その願い、大事な命、守ること、これから、僕たち、私たちが、いや活動、受け継ぎよう♪

中村医師はベシヤワール会が二十周年を迎えた際、「ベシヤワール会は幸運とでも言うべきで、業績を誇るわけでもなく、淡々とこなすべき任務をこなし、多くの人々の支持を集めてきた」と記しました。今後ともそうありたいと願っています。

なお、四十周年を記念して、中村医師がベシヤワール会報に書かれた文章を集大成する『中村哲 思索と行動』(上・下)を刊行いたします。上巻は本年五月末発売予定です。

*PMSの現地ワーカーとして二〇〇五年〜〇八年、二〇一〇年〜一年に活動した杉山大二朗さんの『仁義ある戦い——アフガン水路建設まかないボランティア日記』が忘羊社から発売されました。悪戦苦闘、泣き笑いの日々が軽妙なイラスト・漫画をまじえて綴られています。書店・ネットで購入でき

ますが、事務局でも販売いたします。ご希望の方はメール・FAXでお申し込み下さい。税込み一八七〇円(送料別)です。

●PMS支援室より

*先生、皆で参りましたよ〜！ガンベリの記念塔に描かれた中村先生を見た瞬間、胸にこみ上げるものがあった。植樹作業で共に働いた昔なじみのペラが駆け寄ってきた。聾啞者の彼は身振り手振りで、先生が農場に来た時はいつもお互いを抱きあげるように熱い抱擁で挨拶を交わしていたこと、農場の見回り時の先生が、以前は何もなかったけど、様々な作物が育っていると、とても喜んでおられた様子を懸命に伝えた。そして涙を流しながら、記念塔の先生に両手を差し伸べ、彼の悲しみを語った。ジヤ先生が同様に身振り手振りで通訳してくれるが、ペラの言わんとすることは十分に伝わった。農場の職員による、記念塔の壁や床を毎朝拭き上げるのが彼の日課になっているという。

今日も先生に語りかけながら綺麗にしている姿を思い、「ありがとう、ペラ」と感謝する。

◎村から

*夫の転勤で福岡に暮らし、なんと子どもたちの手も離れた頃、何か実のあるお手伝いをと訪ねたのが中村医師のベシヤワール会でした。初めの仕事は、寄付された切手を台紙に貼ること。これが会報発送の費用になるという目に見える貢献ができてうれしかったのを覚えています。支援者のことばに励まされてのお礼状書きや会報の校正など。時には先生の帰国報告を間近で聴く；そんな一年半を過ごす中で、の悲報。お別れ会にかけた五千人の方々のうち、会場に入りきれない人々は詫げる私を責めることなく、まさに「日本の良心」を見る思いでした。

その後は嵐のような忙しさに自分なりの務めを見出すうち、帰任の日を迎えます。四年半の間、大きな学びを得ました。現地、そして世界に平和をもたらすべいの活動からは離れられそうにありません。身体が戻って来られるかはインシャッラー、ありがとうございます。(T)

会 則

①本会の名称をベシヤワール会とする。
②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州(現カイバルパクトウンクワ州)ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な広報・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局を

〒八二〇〇〇三 福岡市中央区春吉一―一六八 VEGA天神南六〇一
☎九二―七三―一三三七二
内におく。

総会、現地報告会は原則として毎年六月第一土曜日に開催いたします。